Japan Geoscience Union Meeting 2011
(May 22-27 2011 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2011. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

O022-P03 会場:コンベンションホール 時間:5 月 23 日 16:15-18:45

アポイ岳ジオパーク「ふるさとジオ塾」：ゼロからのガイド養成
Report on elementary guide training program in Mt. Apoi geopark

車田 利夫 [1*], 原田卓見 [1]
Toshio Kurumada[1*], Takumi Harada[1]

[1] 様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会
[1]Mt. Apoi Geopark Promoting Council

１．経緯
ジオパークには、利用者をジオストーリーへといざなう質の高いガイド（インタプリター）が不可欠であるが、GGN 加盟を目指すアポイ岳ジオパークにおいても、ガイド養成は最優先課題の一つである。観光が盛んな地域に関連するジオパークでは、既存の観光ガイドの組織及び人材を活用することで効率的にジオパークガイドを養成することが可能であり、既に多くの実践例がある。しかし、アポイ岳ジオパークのある北海道様似町はいわゆる観光地ではなく、観光ガイド的組織は存在しない。町内における唯一のガイド的活動として、アポイ岳の保全活動を行っている任意団体「アポイ岳ファンクラブ」の一部メンバーが、登山者を対象としたガイドを行っている事例が挙げられる。しかし、その活動範囲はほぼアポイ岳登山道に限定され、その内容もアポイ岳の植物に特化したものであり、一般的な観光ガイドとは質が異なる。

２．目的
そのため、当ジオパークにおいてはゼロからガイドを養成する必要があるが、全く下地がない中で町民から希望者を募集しても、それほど多くの反応が期待できないばかりか、逆に敷居を高くし、ガイド候補者の芽を摘んでしまうリスクもある。そこで、まずは町民にふるさとの持つ魅力的な資源を再発見していただくための事業、連続講座「ふるさとジオ塾」を平成 22 年度から開始した。この事業の表向きの位置づけと目的はそれぞれ「町民向け学習会」「ジオパークへの理解促進」である。しかし、そこには、参加者をガイド候補と位置付け、ガイドを受ける側としての経験からガイドへの興味を持っていただくことへの期待も含まれていた。
なお、「ふるさとジオ塾」というネーミングには、(1)「ガイド（養成）」という言葉をあえて使用せず、敷居を低くする、(2) その一方で、参加者を「塾生」と位置付けることで、一定の目的感及び緊張感を意識させる、という狙いを含んでいる。

３．事業内容及び結果
講座は 2010 年 9 月に開講し、月に 1～3 回のペースで、計 8 回実施（2011 年 1 月末時点、全 10 回予定）。形式的に区分すると、野外 2 回、座学 5 回、野外＋座学 1 回となる。講座の内容は、地球科学をメインとするものが半数を占めたが、動植物、産業、歴史など多岐にわたった。講師は、地球科学分野では主に小中学校の現役理科教員に依頼したほか、歴史研究家や地元企業の役員、町学芸員及び当ジオパーク推進協議会事務局職員が担当した。塾生として登録したのは様似町内外の 40 名で、その年齢層は 20 代から 70 歳以上と幅広かった。2011 年 1 月末現在、出席率が 5 割以上の塾生が 21 名と半数を超え、全講座出席者は 6 名となっている。

４．課題と今後の展開
2010 年度の課題として、事業開始が秋であったためにガイド実践の場である野外講座の回数を十分に確保できなかったこと、特に地球科学分野の講座内容の難易度がやや高かったことなどが挙げられる。本事業は平成 23 年度も継続実施する予定であるが、まずはこのような運営上の問題の改善が必要である。
さらに、2 年目は本事業がガイド養成の一環であることを塾生に理解いただいた上で、その性格を強めた内容とすることも検討したい。具体的には、主に初年度に積極的に参加した塾生にワンポイントガイドや講師の補佐役を担当してもらうなど、「伝える楽しさ」を実感してもらえるような工夫が必要であろう。
今後、初年度の塾生に対する意識調査などを行う予定であり、その結果を踏まえながら、ガイド養成に向けた現実的でより良い方向性を模索しながら事業を展開していきたい。

キーワード: 様似町, アポイ岳, ジオパーク, ふるさとジオ塾, ガイド養成
Keywords: Samani town, Mt. Apoi, Geopark, Furusato-Geo-Jyuku, guide training